

伊達政宗公と瑞鳳殿

— 経ヶ峯伊達家墓所について —

公益財団法人 瑞鳳殿 学芸員 渡部 治子



■経ヶ峯の歴史

仙台市中心部の南西にあり広瀬川をはさんで青葉山と向かい合う半島状の丘陵部分を経ヶ峯きょうがみねと称します。古くは仙台開府以前に万海上人まんかいしやうにんという徳の高い僧侶が経文を峯に納めたことからその名で呼ばれるようになったとされています。



図1 経ヶ峯真景図

伊達家廟域としての経ヶ峯の歴史は、寛永13年（1636）仙台藩祖伊達政宗公の埋葬と霊屋瑞鳳殿の造営にはじまります。以降二代忠宗公の霊屋感仙殿かみせん、三代綱宗公の霊屋善応殿ぜんおう、および九代周宗公ちかむね、十一代斉義公なりよし、同夫人芝姫様あつひめの墓所妙雲界廟みょううん、そして五代吉村公以降の公子公女みょううんそのほかの墓所である御子様御廟おこさまごひやうが置かれました。

昭和6年（1931）、瑞鳳殿と感仙殿は江戸初期の廟建築の優れたものとして国宝に指定されましたが、昭和20年（1945）7月10日の仙台空襲によって、善応殿を含め三霊屋は惜しくも焼失しました。



図2 瑞鳳殿本殿

戦後、経ヶ峯は伊達家より仙台市に寄贈され、遺跡として保存されてきましたが、昭和41年（1966）の政宗公生誕400年を契機として、瑞鳳殿再建事業が開始されました。昭和49年（1974）に再建に先立つ発掘調査が行われ、昭和54年（1979）、再建瑞鳳殿が落成しました。また昭和56年（1981）には感仙殿、善応殿の発掘調査も行われ、昭和60年（1985）、二霊屋がそれぞれ再建され、経ヶ峯は往時に近い姿を取り戻しました。



図3 再建瑞鳳殿

■伊達政宗公と瑞鳳殿

仙台藩祖伊達政宗公は永禄10年（1567）8月3日、父伊達輝宗と母義姫（保春院）の第一子として米沢城（山形県）に誕生

しました。幼名を梵天丸^{ぼんでんまる}と称し、元服して政宗と名乗りました。

天正12年（1584）18歳で伊達家の家督を相続すると、南奥羽を中心に佐竹氏、葦名氏をはじめとする諸勢力を平定し、世に「独眼竜^{どくがんりゅう}」の異名を轟かせました。その後、豊臣秀吉による小田原征伐の際、諸大名が臣従の礼をとるなか、東北にあって、関東の情勢を窺い遅参したため、後の奥州仕置きにより会津（福島県）を没収され、さらには旧領であった米沢から岩出山（宮城県）に転封を命じられました。この地で10年を過ごした後、関ヶ原の戦いから間もない慶長6年（1601）、徳川家康の許しを得て仙台城を築き、以後伊達62万石を背景に政治、産業、文化の振興、更には国際外交と、後半生を仙台藩の基礎造りに尽力しました。

政宗公は寛永13年（1636）4月18日、造営中であった母義姫の位牌寺保春院の落慶に立ち会った後、ホトトギスの初音を求めて仙台城下の山々をめぐり、最後にこの経ヶ峯の地を訪れました。経ヶ峯は政宗公がその生まれ変わりとも称された万海上人¹由来の地であり、また当時は仙台平野に太平洋が一望できる景勝の地でもあったと伝えられています。この時経ヶ峯に立った政宗公は、地に杖を立て、死後ここを墓所とするよう家臣の奥山^{おくやま}大学常良^{やまだいがくつねよし}に命じたと言われています。

当時政宗公は重い病²に侵されており、自らの死を予感していたとされます。この出来事の二日後、政宗公は予定を早め江戸へ最後の参勤に赴きました。江戸到着は4月28日で、5月1日に江戸城へ登城し将軍家光に謁見した以後は、屋敷から出ることは叶いませんでした。

政宗公は将軍家光をはじめとする見舞いには、行水して髪を結び、袴^{かみしも}を付けて対面したといます。このような無理が祟ったのか、病状は悪化して行きました。

そうした中で迎えた5月24日の早朝、身なりを整え安坐し、浄土のある西方を

向いて合掌した政宗公は、間もなく江戸桜田上屋敷で70年の生涯を閉じました。

政宗公の遺骸は、朱、水銀、石灰^{かき}（蜆^{はい}灰）、塩で詰め固め、束帯姿^{そくたいすがた}で棺に納められました。棺を乗せた駕籠^{かこ}はその夜のうちに江戸を発し、6月3日に仙台北山の覚範寺に到着。翌4日³、遺言に従い経ヶ峯に埋葬されました。葬儀は6月23日⁴、北山南ふもとの原野（現大願寺）で行われています。

この年の秋、二代藩主忠宗公は、政宗公の霊屋^{こゝろげいん}と香華院⁵の造営を奥山大学に命じました。工期は1年程で寛永14年（1637）10月24日に完成しています。霊屋は瑞鳳殿と名付けられました。桃山文化の影響を受けた建築は当時の匠の手によるもので、本殿・拝殿・唐門・御供所・涅槃門からなり、黒漆に鍍金具、岩絵の具で彩色された彫刻や絵画、蒔絵など壮麗なものでした。

また香華院瑞鳳寺は正宗山と号し、保春院清岳和尚を招いて開山の祖としています。二代藩主忠宗公は伊達家の菩提寺である松島瑞巖寺に政宗公の位牌を安置しました。

法名は「瑞巖寺殿貞山禪利大居士」とし、政宗公は死後、貞山公と尊称されています。



図4 涅槃門



図5 拜殿



図6 二十五聖衆釈迦来迎図

- *1 隻眼せきがんであったとされる
- *2 癌性腹膜炎とされる
- *3 6日との説もある
- *4 24日との説もある
- *5 香や花を手向けるための寺

■伊達忠宗公と感仙殿

伊達忠宗公は藩祖伊達政宗公の二男として慶長4年（1599）12月8日大阪城下に生まれ、幼名を虎菊丸と称しました。母は政宗公正室愛姫（陽徳院）です。十三歳のとき二代将軍秀忠の御前で元服し「忠」の字を賜り忠宗となります。

寛永13年（1636）父政宗公の死によって38歳で家督を継ぎ、二代藩主となりました。その人柄は謹厳実直で、何事も派手であった父政宗公とは違い、柔和な人

物と評されています。一方で「戦国の世に生まれたかった」と家臣に語り、鉄砲や弓術などに秀で、また狩りなどを頻繁に行うなど、武勇にも富んでいました。

忠宗公は法治主義により藩政を確立し、仙台城二ノ丸の構築や瑞鳳殿をはじめとする寺社の造営の他、寛永の総検地や年貢御定、新田開発など、仙台藩の経営面に多くの治積を残しました。こうしたことから忠宗公は“守成の名君”と称されています。

忠宗公は万治元年（1658）7月12日辰刻（午前8時）、仙台城にて60年の生涯を閉じました。死因は大腸の病気とされています。遺骸は束帯姿で棺に入れ、水銀、かきはい 蚌灰で詰め、駕籠に納めて、瑞鳳寺に移しました。墓所は政宗公同様経ヶ峯と定められ、当時西峯にあった虚空蔵堂と別当大満寺を愛宕山に移し、跡地に霊屋が建てられることになりました。

7月14日酉刻^{*1}、棺は駕籠に入れたまま石櫃に納められました。葬儀は8月6日に執り行われています。法名は「大慈院だいじいん殿義山崇仁大居士」とし、義山公と尊称されています。

万治2年（1659）5月、三代藩主綱宗公は霊屋造営を命じます。総奉行は原田はらだ甲斐宗輔、三分一所典膳元景で、途中綱宗公の隠居により造営が遅れましたが、寛文4年（1664）、四代藩主綱村の代に完成しました。

霊屋は感仙殿と名付けられ、建物の配置、規模、構造、装飾など、ほとんど政宗公の霊屋瑞鳳殿と同じであり、本殿、唐門、拜殿、御供所、正門が造られています。



図7 感仙殿本殿

装飾も彫刻は彩色され、漆塗に鍔金具を施された壮麗なものでした。しかし、明治2年（1869）に伊達家の祭祀が神式に改められ、感仙殿は本殿を残し撤去されました。感仙殿正門はこの時多賀城の慈雲寺に移されたとされ、山門として現存しています。なお、本殿脇には古内主膳ら直臣12人とその家士4人の殉死者供養碑として宝篋印塔が建てられています。

*1 午後6時頃

■伊達綱宗公と善応殿

伊達綱宗公は二代藩主忠宗公の六男として寛永17年（1640）8月8日、仙台城二ノ丸に生まれました。幼名を巳之助と称し、実母は忠宗公の側室貝姫*1でしたが、寛永19年（1642）2月貝姫が没し、同年6月忠宗公正室振姫*2の養子となりました。忠宗公と振姫の間には長子虎千代丸*3、次男光宗*4がいましたが、いずれも早世したために巳之助が嗣子となりました。15歳で江戸城にて元服し、将軍家綱より綱の字を賜り綱宗と称しました。

万治元年（1658）7月12日忠宗公の死去により、同9月3日綱宗公は19歳にして仙台藩62万石を襲封し、三代藩主となりました。綱宗公は幼少の頃より鋭敏で芸術の才に恵まれていましたが、酒癖もあり、特に襲封後はその傾向が強まり、親族や重臣、また老中の諫言にも耳を傾けないという状態が続きました。そのため藩の重臣から幕府要人への申入れもあり、万治3年（1660）7月18日、在職わずか2年にして綱宗公の逼塞*5隠居が命

じられました。

以後綱宗公は品川の屋敷で、幼少の頃より恵まれた芸術的天分を発揮し、和歌、書画を楽しみ、能や茶道に精進しました。特に画は狩野探幽に学び、人物、山水画に秀作を残しています。また刀の治法を国包に受け、この方面でも名高いものがあったとされます。その他、蒔絵、彫刻、茶器の自製など、逼塞隠居の身ではありましたが文化人として優雅な生活を送っています。綱宗公は天和3年（1683）剃髪して嘉心^{かしん}と号しました。

綱宗公は正徳元年（1711）6月4日巳刻*6品川屋敷にて72年の生涯を閉じます。6月18日品川屋敷を出棺し、28日に瑞鳳寺に到着。7月1日、遺骸を経ヶ峯に葬りました。この際、家臣14名が剃髪*7しています。葬儀は7月9日に執り行われています。法名は「見性院殿雄山全威^{けんしょういんでんゆうざんぜんい}大居士^{だいこし}」とし、雄山公と尊称されています。

綱宗公の霊屋善応殿は死去の四年後、享保元年（1716）3月20日、五代藩主吉村の時代に完成しました。善応殿は、本殿、唐門、拝殿、御供所、正門からなり、規模は先の瑞鳳殿、感仙殿と同等のものでしたが、装飾については二殿に比べ簡素なものであったと伝えられています。

感仙殿同様明治期に付属施設は整理され、本殿のみが残されました。なお、本殿左前には擬殉者熊谷斎直清^{くまがいいつきなおきよ}の墓があります。



図8 善応殿本殿

- *1 楠筒氏、姉の逢春門院は後水尾天皇の後宮。後西天皇の生母
- *2 池田輝政娘、二代將軍秀忠養女
- *3 7歳で死去
- *4 元服するも19歳で死去
- *5 門を閉ざして昼間人の出入りを禁止する
- *6 午前10時
- *7 殉死の代わりに出家。擬殉という

■瑞鳳殿発掘調査の経過

戦災により焼失した三霊屋の再建に先立ち、昭和49年（1974）に墓室の発掘調査が行われました。

〈墓の構造〉

瑞鳳殿跡の敷地の下は、1.2メートルにわたって礫と粘土の層を交互に重ねて突き固められ、その下よりやや北側に石室を発見しました。材質は蓋石を含め秋保石と称する名取郡秋保地方産の凝灰岩で、切り石を本実、合欠の技法でもって組立て、隅石は一枚の「L」字形の石を用いるなど精巧なもので、内部には一滴の水もありませんでした。

石室の大きさは、内法で南北約118センチ、東西約182センチ、深さ約145センチで、瑞鳳殿の床面から墓底までの深さは、約3mでした。

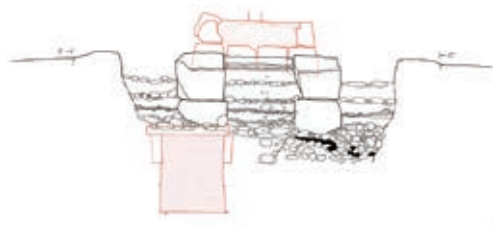


図9 石室見通図

〈墓の内部〉

石室の中には、遺体を納めた棺を乗せた駕籠と太刀、脇差、蒔絵箱等の副葬品が遺存していました。棺は板が腐朽し、その中に石灰が詰められていました。後の調査で石灰は蛎殻を砕き細片としたものであることが判明しています。石灰とともに棺内に詰めたとされる水銀、塩は、再度の化学分析にもかかわらず検出する

ことはできませんでしたが、木炭が石灰塊の下部から発見されました。

棺を輿や駕籠に乗せたまま埋葬する風習は、当時の上流階級の間にはすでに存在しており、二代將軍秀忠もまた輿のまま葬られたとされています。政宗公の墓の場合は、棺を入れた駕籠を石室内中央に安置し、西北隅に副葬品を置き、蓋石を乗せ、その上に土をかぶせ埋葬したものと推定されます。

副葬品はすべて石室の西北隅に置かれていましたが、鎧櫃の下から束帯等を入れた衣裳箱が発見されました。「御名語集」、「貞山公治家記録」には遺骸は束帯を身につけたとありましたが、実際には束帯の材質である絹布の痕跡はなく、棺内から発見されたものは、麻布だけでした。政宗公が没したのは太陽暦では初夏の頃であり、麻の帷子を着せたとも考えられます。

衣裳箱に残っていたのは、冠、石帯の漆を用いた部分だけで、絹布以外は残っていませんでした。これは石灰中のアルカリによって溶けて消失したものと推定されます。また、太刀は鎧櫃に寄せかけてありましたが、その緒は「政宗公記」や「御名語集」に記されているような革緒ではなく平打紐でした。



図10 墓室内部

〈副葬品の調査結果〉

副葬品としては「貞山公治家記録」、「政宗公記」等の記録にも見られる太刀、脇差、具足、蒔絵箱、硯箱、筆入、印籠、香合、煙管等の、62万石の大名の日常生活を偲ばせる政宗公愛用の品々が発見されました。

○具足（再埋葬）

鎧櫃の中に納められていた具足は、現在仙台市博物館所蔵の伊達政宗公所用と伝わる鉄黒漆五枚胴具足（国指定重要文化財）とほぼ同じものであり、鎌倉雪の下胴と呼ばれるものです。この具足は「貞山公治家記録」付録によると古雪の下彦七鍛練の具足で、政宗公が天正13年（1585）11月の人取橋の戦いに着用したものとされますが、調査の結果、弾痕などは見つかりませんでした。なお、副葬の兜に銘はなく、弦月形の前立も発見できませんでした。前立については木製のため腐朽したものと考えられます。



図11 鉄黒漆五枚胴

○金梨子地桐葵紋蒔絵糸巻太刀（仙台市博物館蔵）

太刀の銘の有無は錆化のため、X線透視によっても不明でしたが、姿から見て鎌倉時代のもので推測されます。二代藩主忠宗公墓に副葬した太刀は「友成」の作と伝えられていますが、政宗公の太刀もそれに劣らぬ名刀だったと考えられます。



図12 金梨子地桐葵紋蒔絵糸巻太刀

○黒漆地葛蒔絵文箱（同）

蒔絵箱類の多くは石室床面上から発見されました。これは鎧櫃上に積んであったものが落下したためと推定されます。木質部はほとんど腐朽していますが、漆膜がかろうじで残り、その姿形を保っていました。いずれも使用痕が残っており、政宗公が生前愛用していたことがうかがえます。



図13 黒漆地葛蒔絵文箱

○文具類（同）

墨はすりへり、筆先には墨が付着、硯面にも墨が残っていました。記録によれば政宗公は、死の前日まで近親者に手紙を書いています。これはその時に使用したものと推測されます。墨は方干魯の製作した明墨を使用しているのに対して、硯は仙台領雄勝産の玄昌石製を使用していました。



図14 梨地梅笹蒔絵硯箱

○煙管（同）

政宗公は愛煙家で死の前日まで煙草を飲んでいたとされますが、墓室からも煙管が二本出土しています。煙管は梨地蒔絵の煙管箱に雁首、吸口、羅宇が分離して収納されていました。これを継ぐと65～70センチになり、近世初頭の風俗画に描かれているような長い煙管になります。なお、日本に現存している煙管中、使用年代のはっきりしているものとしては、この二本が最も古いことになります。



図15 煙管

○革袋の中身（同）

鎧櫃のかけから政宗公の巾着と思われる革袋が発見されました。その中には、慶長一分金三枚、日時計兼磁石、金製ブローチ（バックルとも）が納められていました。懐中日時計兼磁石は、携帯用で、戦場や旅行の際に使用したものの推測されます。使用年代がはっきりしているものとしては、煙管同様日本最古のものと考えられます。



図16 懐中日時計兼磁石

○ヨーロッパ伝来と思われる副葬品（同）

副葬品の中には、ヨーロッパ伝来と思われるものが四点出土しています。金製ブローチ、銀製服飾品、鉛筆、筆入のガ

ラス板です。17世紀初頭は、まだヨーロッパとの交流が行われており、慶長16年（1611）には、イスパニア大使セバスチアン・ビスカイノが来仙して政宗公に謁見し、ロンドンの上黒羅紗の他300ドカド（お金の単位）以上の贈り物をしています。

こうした副葬品からは、ヨーロッパ伝来の品が有力者の間で珍重されていたことが伺えます。



図17 金製ブローチ



図18 銀製服飾品



図19 筆入れ

■感仙殿・善応殿発掘調査の経過（同上）

感仙殿、善応殿の発掘調査は昭和56年（1981）に行われました。（善応殿の第二期石室調査は二年後の昭和58年（1983）

〈忠宗公墓室の学術調査〉

石室は本殿床面下110センチの深さにあり、蓋石は砂質頁岩でできた巨大な石で、三枚を東西に敷き並べ、蓋石の重ね目には中世の板碑二枚を置き、更に蓋石の東、南、北側に土留めとして三枚の板碑が使用されていました。この蓋石を取り除くと南北221センチ、東西158センチの長方形の墓室が現れました。墓室の側面は安山岩の割石や玉石を積みあげてあり、深さは165センチで、底には径3-20センチの礫が敷き詰めてありました。



図20 板碑出土状況

墓室中の上部には葬送に用いたと思われる材木片が散乱していました。この材木片を取り除くと忠宗公の遺骸を覆っている石灰塊が現れました。遺骸は棺に納め、汞（水銀）と蛎灰を詰め乗物（駕籠）に乗せて葬ったと記録にありますが、棺、駕籠は崩れ落ちており、台枠のみが確認されました。

石灰塊をくずすと忠宗公の完全な遺骨が東西して両手を前方に合わせ、やや後によりかかった安坐の姿で現れました。この石灰の中から防腐剤として用いたとみられる水銀が「義山公治家記録」に記されていた通り、相当量（800グラム）検出されました。

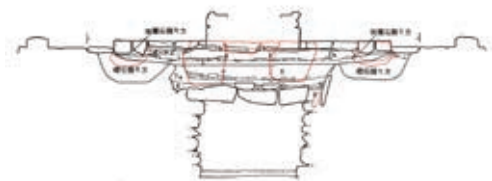


図21 墓壇断面図（感仙殿）

〈副葬品の調査結果〉

棺の内部には金箔張りの扇子、棺の前には刀、脇差がありました。刀は錆のため銘は不明ですが「義山公治家記録」には孫六兼元の作との記述があり、鞘は黒漆塗、刀身91センチ、鍔は鉄の丸鍔で、柄には金製の猪二匹の目貫がついていました。



図22 二匹猪金目貫

脇差は記録により栗田口吉光の作と思われる、綿の袋に入っており、長さ56センチ、合口式で鍔はなく、銀の目貫がついていました。棺の北隣には具足一式を入れた鎧櫃があり、その上に風折烏帽子がありました。具足は通常よりも大きく、胴は黒漆塗五枚胴で9個の金製の九曜紋が前後左右についていました。兜は鉄黒漆塗で目庇には金の覆輪がついています。



図23 鉄黒漆五枚胴

鎧櫃の前には、友成作とされる長さ116.5センチの鮮やかな糸巻太刀がありました。

鞘は黒漆塗で伊達家の家紋九曜紋と縦三引両紋が交互に金蒔絵で付けられ、鍔は木瓜鍔で桐紋を高彫りしてありました。これらの副葬品は、いずれも豪華なもので62万石の大名にふさわしいものです。



図24 黒漆地九曜三引両紋蒔絵糸巻太刀

〈綱宗公墓室の発掘調査〉

綱宗公墓室の調査は忠宗公墓室発掘と同時に開始され、地下50センチの位置で石櫃を発見しました。石櫃は縦横67センチ高さ68センチで、青銅のベルトが1本掛けられていました。石櫃の中には木箱とそこに納められた磁器の甕があり、さらにその中の曲げ物の底に智歯（親不知歯）1本が残っていました。これは獅山公治家記録によると、綱宗公埋葬四年後の正徳4年（1714）6月3日松島から綱宗公の遺歯を重臣高橋丈之進が持ち来って、綱宗公の墓所を守っていた熊谷齋直清に渡し、追葬したものであるとされています。

この石櫃の下に、長さ250センチの巨大な粘板岩の蓋石三枚が南北に並べられており、その重ね目には漆喰が塗ってありました。蓋石を除くと忠宗公の墓室とは全く異なり、180センチ四方の間知石積みみの石室で、内部に上縁から約10センチ下のところまで全面石灰で固められており、破損崩壊の状態は全く見られず、遺体や副葬品は良好に保存されていました。

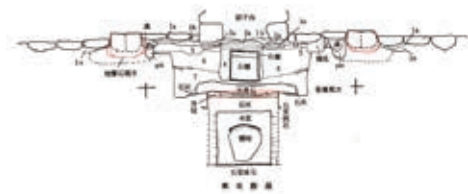


図25 墓壇断面図（善応殿）

石室内の石灰層を取り除くと木室があり、さらにその中に甕棺を納めた木製の外箱がありました。この外箱には運搬に利用されたと思われる鉄製の吊り金具がついていました。

甕棺を取り出すと、外箱の中に煙管二組、打刀、水晶製の眼鏡凸レンズ二枚、皮革に金箔で模様を押した眼鏡ケースが発見されました。

甕棺の中は石灰で詰め固められており、綱宗公の遺体及び多くの副葬品が納められていました。



図26 石室内部

遺体は密封甕棺のため極めて保存状態が良く、着装は綿の代わりに和紙を入れた平絹の袷の小袖で、縞縺子の帯を締め、上に顕文沙の羽織を着せてあり、縺子の褥（坐布団）の上に坐していました。顔の正面に土佐（飯村土佐守藤原光重）の銘がある直径30センチの柄鏡、その傍らに高さ50センチの黒漆塗に雪輪、葛、浮草、萩の蒔絵をほどこした鏡掛があり、胸の付近に金襴の袋に入れた長さ51センチの脇差、金箔を貼り付けた扇子、数珠、六道銭（寛永通宝）を入れた金襴の巾着、緞子の小物入れなどがありました。小物入れには銀の留金が付いており、中には懐中鏡、懐中規、香道具、細工用コンパス、T定規などが入っていました。

遺体の南側には、縮緬の風呂敷に包まれた手箱がありました。この手箱は、外面が漆をかけた網代で、内面は黒漆塗に下り藤文様の蒔絵を描いたもので、中には蒔絵をほどこした櫛三枚、紅皿二個、その他種々の化粧道具が入っていました。また遺体の下の褥の下に宝永小判金10枚が並べてありました。

これらの副葬品はいずれも優美華麗なもので風流優遊の生活を送った綱宗公にふさわしいものです。



図27 柄鏡



図28 雪輪文鏡掛



図29 手箱とその中身

〈三藩主遺骨の学術調査〉

○伊達政宗公復元顔像（瑞鳳殿資料館蔵）
額は広く後頭部が張り出した長頭型。「独眼竜」の異名の通り疱瘡により右目を失明していました。

（顔 面）細面で鼻筋の通った貴族的形質
（四肢骨）筋肉の発達がよく鍛錬された身体

左腓骨に完治した骨折跡あり

（身 長）159.4センチ（当時としては平均）

（血液型）B型

（死 因）食道噴門癌兼癌性腹膜炎（文献より推察）



図30 伊達政宗公復元顔像

○伊達忠宗公復元容貌像（瑞鳳殿資料館蔵）
政宗公に比べ短頭。

（顔 面）鼻骨が隆起。鼻筋の通った貴族的形質

（四肢骨）忠宗公の時代は泰平で戦陣に臨むことは殆どなく、従って政宗公程骨格は頑丈ではなかったが、射術、乗馬の名手であっただけに、肩、肘、膝が非常に発達していた。

（身 長）166.3センチ

（血液型）A型

（死 因）腸の病気（文献に痢病と記載あり）



図31 伊達忠宗公復元容貌像

○伊達綱宗公復元容貌像（瑞鳳殿資料館蔵）
短頭で忠宗公と相似点が多くみられました。

（顔 面）瓜実型の鼻筋の通った貴族的容貌

（身 長）156.2センチ

（血液型）A型

（死 因）下顎歯肉癌（文献及び学術調査により判明）



図32 伊達綱宗公復元容貌像

■公益財団法人瑞鳳殿の主な事業

昭和41年（1966）、伊達政宗公の生誕400年を契機として、瑞鳳殿再建の機運が高まり、瑞鳳殿再建期成会が発足しました。その後財団法人瑞鳳殿と名称が変わり、平成24年からは公益財団法人瑞鳳殿として、仙台藩以来の文化的遺産である瑞鳳殿、感仙殿、善応殿の三霊屋及び経ヶ峯内伊達家墓所の保存整備や伊達家霊廟等に関する調査研究等を行っています。

瑞鳳殿の主な事業の一つに、三藩主の遠忌法要があります。仙台の基礎を築いた藩主の顕彰のため、毎年5月24日、6月4日、7月12日の各御命日に、旧仙台藩家臣などの関係者が参列し、関係社寺による読経をいただいています。法要の日は終日、霊屋の扉が御開帳となり、本尊である御木像を拝観することができます。



図33 命日の御開帳の様子（瑞鳳殿）

また瑞鳳殿では、例年8月6日・7日・8日の仙台七夕の期間に「幻想灯夜 瑞鳳殿七夕ナイト」と題してライトアップイベントを開催しています。およそ1000本の竹灯籠と仙台七夕伝統飾りである七つ道具が境内を彩ります。宵闇に金色に光る瑞鳳殿や風に揺れる灯籠の灯りは幻想的な風情を感じさせます。



図34 幻想的な雰囲気のある瑞鳳殿本殿

さらに七夕ナイトでは三日間に渡り、境内の各所で篠笛の演奏が行われ、また特設ステージでは和太鼓などの森のコンサートが行われます。藩政時代から保たれた自然の中での音楽ステージは毎年大変好評をいただいています。

この他の事業として、付属資料館では年3回の企画展を実施し、大学などの研究機関へ試料や情報を提供し副葬品等についての分析調査を進めています。

■おわりに

2020年から流行した新型コロナウイルス感染症によって、観覧者数は一時例年の40パーセント程度まで落ち込みました。そのような中で瑞鳳殿本殿と伊達政宗公御木像の修繕工事を実施することになり、文化庁からの補助金のみでは修繕費用を賄う事が困難であったため、財団で初めてクラウドファンディングにより広く皆様の御芳志を募る事になりました。最終的に1,299名の方々からご寄付をいただき、無事修繕工事を完了することができました。またその際、大変温かい応援のお言葉を多く頂戴し、仙台藩祖伊達政宗公と瑞鳳殿がいかに皆様に愛されているかを改めて実感しました。

そうした皆様のお気持ちを大切にしながら、今後も瑞鳳殿をはじめとする三藩主霊屋と藩政時代の面影を色濃く残すこの経ヶ峯の自然を守って行きたいと考えております。

御命日やイベント、観光など、お近くにお越しの際はぜひお立ち寄りいただければ幸いです。



図35 修繕後伊達政宗公御木像

【主な参考文献】

- ・ 瑞鳳殿再建期成会『瑞鳳殿跡発掘調査 伊達政宗公の墓とその遺品』
- ・ 財団法人瑞鳳殿『感仙殿善応殿跡発掘調査 伊達忠宗公 伊達綱宗公の墓とその遺品』